第二章 学ばざる人々と…

手渡された一枚の書類に視線を落としたクローネス・マールクの表情は、この上もないほど惘然としたものだった。首相官邸玄関警備の衛兵が捧げ銃で、宇宙軍大将への礼を示すのにも面倒臭そうに答礼を返しただけだった。

「その表情じゃ、辞めるところじゃなかったようですね」

待っていたエア・カーに乗り込むと、運転手が振り返った。淡い金色の髪と、穏やかな翠色の目をした感じのいい青年である。非人間的な無表情さが売り物のはずの衛兵たちが、彼の姿を認めてわずかに驚きの表情を露にする。この年、共和国暦七十七年で二一歳になるネイス・ミュッケルは宇宙軍中将、宇宙艦隊副司令長官と第一艦隊司令官を兼任する。「ドレド戦役」では無数の武功を立て、「マールク艦隊最高の智将」とまで讃えられるその名將が自らハンドルを握っている姿は、共和国政府首脳の日常を見慣れた衛兵たちには、非日常的な光景に映ったとしても無理はない。

「相手にもしてもらえなかった」

「そうでしょうね。今、閣下を辞めさせる馬鹿はいないでしょう」
エア・カーが発車する。窓外に流れていく、再建途上の共和国首都レイヴェルゲンの町並みを見るマールクの視線は決して好意的なものではなかった。

「そうは言うけどね、ネイ。わたしたちが軍人になった……というか、させられたのは“ドレド戦役”のせいだったよ。戦役は終

わったんだ。なら、もとの人生を返してくれてもいいじゃないか」

「……」
まだ二〇代なんだから、やり直しはいくらでもできるはずだ……言いかげ、マールクは言葉を咽喉の奥に押し込む。運転席に座るミュッケルが、戦役で両親を亡くしていることを不意に思い出したのだ。死者は永久に返らない。

「あ、そうか……そうだよな。返らないものもあるんだった」

「いえ……」

「悪い。そういうつもりじゃなかった……ただね、これだよ。辞表出したら、代わりにこんなものくれたよ」

ミュッケルは、マールクの差し出す書類に肩こしの視線を投げ、形のいい眉をわずかに動かした。

「宇宙軍元帥……ですか？」

「ああ、元帥だつてさ。大将だけでも沢山だつてのに、この上元帥だつてさ」

軍における階級を絶対視する大部分の宇宙軍高級士官が聞けば、「マールク提督は、軍の秩序と統制を冒瀆する許しがたい反軍分子だ」とでも吠えつかれかねない台詞を、マールクは平然と口にする。

マールクとミュッケルは、「ル・ラント共和国の歴史上最も愚劣な戦役」と呼ばれる「ドレド戦役」で共和国に逆転勝利をもたらした“生きた伝説”たちだった。そう呼ばれることに彼ら自身がいかにも居心地の悪さを感じようとも、マールクとミュッケルが共和国史上に屈指の名將たちである事実は変わらなかった。

だが……とは、マールクと彼の僚友に共通する屈託である。彼らは、“残忍な宇宙の独裁者”の一方的な侵略から共和国を救った

わけではなかった。惑星ドレドは恒星系ゲツセルの第四番惑星。共和国暦五〇〇年代に発見され、開拓された。極度に乾燥した気候の惑星で、本来は植民に適さなかったが、共和国母星の人口増加の圧力は選択の自由を許さなかった。

伝統的な農耕にこそ適さないとはいえ、豊かな資源に恵まれたゲツセル恒星系であり、惑星ドレドだった。鉱工業を発達させ、人工的な農業プラントの建設を行なうことも決して困難ではなかったはずだ。共和国政府にその意思があれば、だが。

共和国政府には、意志も能力もなかった。いわく、“時間がかりすぎる”、いわく“五〇年後よりも今の生活を改善するほうが先だ”。そして典型的には、“票にならぬ”。政府は、まるで難民を送り出すかのように、母星から移民船団を送り出し続けた。初期の頃はともかく、共和国暦の六〇〇年代中期に入ると、移民船の乗客に顕著な偏りが生じ始める。失業者、犯罪者、高騰する母星の物価に生活を維持できなくなった低所得者などである。

「すでに母星は飽和している。政府は、彼らに新天地で新たな人生を切り開くチャンスを与えるものである」

共和国政府の宣言を信じる共和国市民は少なかったし、ドレドに至っては皆無だった。新天地を切り開こうにも、ドレドも飽和しかかっていたのだから。共和国暦七〇〇年代に入ると、共和国の人口は一三〇億を突破。母星ル・ラントでは居住面積の不足が深刻化し、植民星ドレドでは食料不足が現実の問題として表面化した。

もっとも、マールクは食料問題が“ドレド戦役の”直接の原因だとする通説には賛成していない。戦役を仕掛けたのはドレド自治共和国の方だが、ドレドが仕掛けてこなかったら、いずれ共和

国の方が仕掛けただろう……意地の悪い見方かもしれないがマールクはそう思っている。マールクの現在の共和国政府首脳に対する評価は、決して高くない。寧ろ、最低に近い。マールクはミュッケルに語ったことがある。

「ああいう連中がね、軍備を持った上に敵まで与えられたら戦争を始めないわけがないじゃないか」

身も蓋もありませんね、とはミュッケルの応答である。

いずれにしても共和国暦七〇九年に始まった“ドレド戦役”は、マールクの人生を変えた。平凡な大学生に過ぎなかった彼が、“学徒動員法”なる戦時立法で戦場に引きずりだされたのが七一年。当時の宇宙軍参謀総長ヴェレックス・ターク大將は議会で演説したものだ。

「そもそも国家に何らの貢献もなさざる点に於いて、文学こそその一なるものであります。歴史学然り、経済学然り。かくのごとき現実遊離の学問を名目に、いまだ国家にその身命を捧げる崇高なる義務に就かざる者数十万。多くの忠勇なる宇宙軍將兵が、国家の尊嚴と宇宙の大義のために戦場に散華しつつある今、彼らをして無為の学問を捨て銃を執らしむるこそ、聖戦の目的に叶うものと確信しあるしだいであります」

ひどいことを言う……大学の寮でおんぼろのTVセットを眺めながら、憮然としていた記憶が、もう五年も前のこと。当時のマールクは大学の四年生。成績は悪くなかったのだが、研究室の教授の受けは今一つ良くなかった。

今度こそは完璧だと自負して提出した論文を、教授は一度ならず却下したり、そうでなくても“その他大勢”的に扱ったものだ。

「我々の専攻は何だったか？ 比較文学史ではなかった筈だ。違

うかな？ きみの悪い傾向は、すぐに専攻分野からはみ出すことだ。学究としては誉められた資質ではないな」

それがマールクに向けられた教授からの評価の最大公約数だった。

「は……」

「まあ、レポート自体のできはそれなりにいいから、書き直しはしなくてもいい。ただし、次回からはこういう型破りなものは提出しないように、いいね」

「……」

そういう経緯があったから、マールクとしては大学に残るうなどという考えはなかった。入学後に得た奨学金は、卒業後、地方のハイ・スクールでの教鞭を要求していたし、マールクもそれに従うつもりだったのだが。

召集と速成訓練。余りの運動神経の鈍さのゆえに、マールクは後方勤務本部へ回され、数字と書類の山のなかを一年近く這い回された。その挙げ句、七十二年の十二月、いきなり中尉への昇進と同時にナキヤソ要塞駐留機動艦隊司令官ミウトウレイ・ロメイチエフ中将副官への任命。

「ロメイチエフ提督から、“優秀な戦術眼のある副官を”との要求が来ておる」

直接の上官だったパウエル少佐は辛辣な皮肉屋で、特に学生出身の速成士官たちに陰湿な圧力を加えるので有名だった。

「速成教育時の貴官の成績は、はつきり言って最悪だ。士官学校だったら、即日退学処分になっても文句はいえん。艦載機の操作はだめ、銃はまともに撃てない、戦闘技術は最悪、機関工学、航宙工学、いずれも最低レベル。そのくせ、戦術シミュレーション

の成績だけはむやみにいい。まあ、あたまでっかちの学生であれば、シミュレーションとも相性がいいんだろうが」

言い掛かりだった。マールク達がやらされた戦術シミュレーションでは、実戦以上に不確定要素が取り入れられ、机上の戦術講義の暗記だけでは勝てるものではなかった。もつとも、教官を務める参謀士官たちには、すべての情報リアル・タイムで知らされていたのだけれども。その条件ですら、マールクは、教官相手の対戦で三度のうち二度は有利な戦いを展開し、不利に陥っても必ず相手に十分な損害を与えて退却させたものだった。

「ま、そういうことだ。副官なら自分で身体を動かすこともない。貴官には似合いだろう。どうせ、長いことではあるまいがな」

長いことになってしまった。

マールクに戦術と戦略に対する興味を抱かせたのは、皮肉なことに速成教育時代の戦術シミュレーションだった。

「要するに、相手を諦めさせればよい。諦めさせるには正面から相手の艦隊を粉碎するか、そうでなかったら相手が、これは引き合わない、と思うような損害を与えてやればよい」

具体的にはどうすればよいのか……任務の合間を縫うようにして、マールクは資料を集め、自分なりの作戦案を組み立てていた。教授に指摘されたとおり、自分には専攻分野からすぐにはみ出してしまふ癖があるみたいだな、と思いながら。

日の目を見るとは思っていなかった作戦案は、思いがけずロメイチエフ提督によって採用された。

「貴官、本当に軍事教育を受けたことはなかったのか？」

作戦案に目を通したロメイチエフの口調は、感嘆を通り超して呆れ果てていた。

「まあいい。久しぶりにまとも、というより軍事作戦らしい作戦を聞かせてもらった」

高くついた戦勝だった。ドライバオムの会戦に先立って、ドレド艦隊は母星の本国艦隊を全滅させた。ドレド艦隊は、勢いにのって母星を包囲し、そしてその威圧に耐えかねたのが母星上の防空基地群だった。恐怖にかられた防空基地群は、命令をまたずに防空戦闘に突入してしまい、ドレド艦隊もこれに応じた。結果は、母星表面の三分の一以上を覆うことになった焦土と一〇億をこえる死者。

ドライバオムで辛うじての勝利を掴み、帰還したマールク艦隊の将兵は、変わり果てた母星の有り様に呆然となった。ネイス・ミュッケルも両親を亡くし、辛うじて双子の姉であるアリシアの無事を確認しただけだった。

エア・カーがスピードを落とす加速度が、マールクを長い回想から醒めさせた。市内を走るフリー・ウエイから外れ、レイヴェルゲン郊外に広がる閑静な住宅街に入っていく。シールキツヒと呼ばれるこの一画には、やはり七一年六月の母星空襲のおりにドレド艦隊が墜落している。ミュッケルの両親を奪ったのも、この戦艦の墜落だったという。

「姉が待つているでしょう。残念ながら、閣下の退官記念パーティにはなり損ねましたが……姉は、閣下の辞職には反対でしたから却って喜ぶかも知れません」

「今の首相はわりにもの分かりもいいし、識見もある人物だと思つてたんだがな」

「フェレラ首相ですか？ ええ、姉はかなり高く評価しているようですが」

「だろ？ ま、いいか、こういう謎解きは、きみの姉上の方が得意だったな」

空襲以来三年、シールキツヒの住宅街もほぼ再建を済ませていた。ミュッケルの実家……というより、今は姉アリシアの邸宅は、かつてのミュッケル姉弟の実家と同じ住所に、同じたずまいを見せている。邸宅というほどのことはない、周囲を低い軽合金の柵で囲まれたありふれた二階屋である。綺麗に苳り込まれた芝生は、季節が冬ということもあって白茶色く枯れているが、荒れた印象のかけらもない。

「ネイなの？」

エア・カーの音を聞きつけたのか、庭に面した出窓が開いてうら若い女性が半身を覗かせる。エア・カーを止めたミュッケルが軽く手を振るのに、やはり右手を軽く上げて応えた。

「どうだったの？ マールク提督とお呼びしないといけないのか、それともマールクさんで済むのか教えてくれない？」

「依然、マールク提督です、姉さん」

「そうなの？ そうだろうと思つたけれど……早く入って。風邪をひくわ」

ネイの姉アリシアは軽やかな動作で上体を引つ込める。豊かな髪が弱々しい冬の日差しを孕んで黄金色の光の軌跡を描いた。ほどなく玄関のドアが開いて、アリシアが優美な長身を現わした。

「お待ちしました、マールク提督。もう先客がありますけど」

「ヒースクリフでしょう？」

「ええ、でもどうしてお分り？」

「美人の家で酒が呑めると聞いて来ないはずがないですよ」

「お褒めにあずかって恐縮です、マールク提督」

アリシアとネイは二卵性双生児だというから、容姿が瓜二つというわけではなかった。金髪と翠色の瞳は共通しているが、ネイの第一印象が端正さなら、アリシアのそれは華麗さだった。マールクの幕僚の一人、ファートウリック・ラング提督は手記にそう記している。

“ドレド戦役”中にアリシアは下院議員に立候補した。“ドレドへの復讐”に沸き立つ母星で、公然と“戦争継続反対”を唱えた彼女の当選を予測する者は皆無だった。それだけに、七一年の中間選挙で二〇歳の下院議員が誕生したときには誰もが啞然としたものだったのだ。

“奇跡”と人々は呼び、^{はたち}二〇のお嬢さんに何ができるものかと評した。が、アリシアは首都レイヴェルゲンの再建委員会の一角に席を占め、首都とドレドの再建に水際だった手腕を見せて周囲に驚愕の種を供給し続けている。

「マールク閣下にアリシア・ミュツケル下院議員の弟君、ようこそこられた。さあ、席におつきください」

心地よく暖められた居間に、先客が二人。一人は幅の広い堂々たる長身に、華麗な金髪の所有者。もう一人は、強い鉄色の髪をした細身の若者だった。その若者が立ち上がり、固い調子で敬礼する。

「お先に失礼しております、マールク閣下、ミュツケル閣下」

「おい、メル、プライベートな席だ。そのいかにも軍人でございませうって調子はやめろ。肩が凝っちまう」

金髪の青年……マールクのもとで第二艦隊を指揮するヒースクリフ・ローナク中将。攻勢での苛烈さと勇敢さから、“勇将ローナク”と呼ばれる彼も、マールクと相前後して動員された学生の

出身である。学生時代は母星屈指の名ラインバッカーとして知られている……が、たしなめる口調に酔いを見せていた。

「ヒースの言うとおりだよ、メル。今日は、みんなプライベートな客として集まっているんだ」

「それはわかつているつもりなのですが……」

鉄色の髪の若者、メル・ヤンデキフィティは未だ二二歳。“ドレド戦役”中は、ローナク艦隊の副司令官として活躍し、昨年新たに編成された第七艦隊の司令官に就任したばかりである。貧家に生まれ、家族がドレドへ強制的に移住させられそうになるのを防ぐために志願して宇宙軍に入隊。格闘戦集団を指揮した接近戦に抜群の手腕を見せ、ロメイチェフに抜擢された。

「それで、首尾の方は？ 我々としては、マールク閣下の退官には反対なんです……いえ、これは小官、いえ、わたし一人の私見でなく、我が艦隊将兵の多数意見と称してもさしつかえない……」
マールクの慥然とした表情がますます洪くなる。姉を手伝って料理のワゴンを押してきたネイがくすりと笑う。

「ミスタ・ヤンデキフィティ、難しい話は少し措くことにしません？ 取りあえず、再会を祝して乾杯ということにしましょう」
ローナクの手土産だという白ワインを抜き、五人の男女はグラスを掲げる。アリシアが首を傾げた。

「マールク閣下の元帥昇進を祝して、ということにしましょうかしら？」

ほう、という視線がローナクとヤンデキフィティからマールクへ送られる。マールクははつが悪そうに茶褐色の髪をかき回した。
「あ、まあ、ね、そういうことだけど、そんなに祝うほどのことはないんじゃないのかな……」

「世間的には祝すべきことなんでしょう？　では素直に祝いましょう」

アリシアに止めを刺されて、マールクは黙り込む。

「では、マールク元帥の誕生を祝して……乾杯！」

ネイが音頭をとり、四つの声が和した。

「まあ、結局、共和国政府も馬鹿じゃなかったってことだ。マールク艦隊を統べるにマールク閣下以上の人材は考えられない。今の時点で、閣下をあっさり手放せるほど、宇宙軍も人材豊富じゃないってことさ」

「そうかね、ヒース？」

「そうですね」

「しかし、もう戦争はあり得ないんだ。ドレドは……やり過ぎるほどに叩かれてしまった。多分、半世紀は再起できないだろう。

今の首相は、割にその辺のところがわかっているとってんだがなあ」

後半は半ばアリシアに向けた質問だった。

“ドレド戦役”を指導した……ことになっている……共和国主席（首相）ランルサク・ヘンチエは、戦役の終結とともに英雄になってもよかった。戦役を通じて無為無能、なんらなすところはなかったとはいえ、とにかく戦勝の日に共和国政府の最高権力者の座にあったのだから。

「実際のところ、ドロク大将閣下も元帥になられ、勲章で埋まっておられましたね」

ヤンデキフィティの批評が毒を孕むのは当然である。参謀本部を統べるデスタリヴァ・ドロク大将と、フォルター・ワシエック中将は、まさにその席にあったというだけで、“救国の英雄”とし

てマールクと並び讃えられているのだ。

ヘンチエの不幸は、不名誉な疑獄事件と盗聴事件に連座したことだった。すでに参謀本部と太いパイプでつながれた既存の軍需産業に割り込みをはかった新興の軍需企業があった。ワーデルガートというこの企業は、ヘンチエの主宰する政治派閥に莫大な資金を提供するとともに、既存の産軍複合体に亀裂を穿つ目的で非合法的活動を繰り返したという。その活動が共和国検察局の摘発を受けたのが七一年末。

「それこそあつと言つ間もなくヘンチエ首相にまで捜査の手が伸びて、一巻の終わり……あんなに手際のいい捜査というのは、ここ二〇年くらいで例がないわね」

ヘンチエの後継者選びは難航し、無意味とも言える政争が二カ月余り続いたあとに立てられたのが現首相のピセンテ・フェレラである。

「はつきり言つて、共和国には惜しいくらい識見をもった政治家。度量もあるし、視野も広い。ミスタ・ヘンチエと登場の順番を入れ替えてくれなかったのが惜しいわ」

決して主流に立っている人物ではないという。戦役中も早期の講和を唱え、マールクの上申書にも無条件の同意を示していた。が、それがゆえに戦争の継続を政権維持の必須条件と考えていたヘンチエの一派、戦役の勝利での権威高揚を願う宇宙軍参謀本部、

戦争景気^{うけ}で有卦^{うけ}に入る軍需産業からの忌避を買っていた。

「そういう人物が首相の座に就くというのはおかしいな」

「それでもありませんわ、マールク提督」

「……？」

「五年前だったら、ミスタ・フェレラも政治を左右できたと思

ます。でも、今は軍の力が強くなりすぎました。誰を政治のヘツドに据えても、政策の変更はあり得ない……ドロク元帥あたりはそう考えているんでしょう」

「当たってなくもないが、当たってないところもあるな。ヘンチエ首相が続いていたとして、ドレドの降伏はなかったかもしれないから」

ドレドが艦隊戦力を失い、政治的にも組織的な抵抗力を完全に失った段階になっても、参謀本部は戦争の継続を唱え続けた。

「ドレドには依然、反政府、無政府主義の反国家主義者がゲリラとして活動中である。彼らを完全に駆逐し去らないかぎり、聖戦目的が達成されたとは到底言いがたいのであります！」

参謀本部を抑えたのはフェレラの功績だった。彼はドレドの無条件降伏を受け入れ、ドレドの再建計画プロジェクトを発起させたのだ。

「先日の議会でだけけど、ドレド空襲は無用のことだった。無用にドレド市民の生命と財産を損ねた点で軍部の責任は免れがたい……て答弁して大騒ぎになったわ」

「神聖不可侵の軍部……参謀本部を批判したから？」

「そんなところですよ」

「やれやれ、何が神聖不可侵なんだか。それに、ドレド空襲といえば、我々にだって責任がないわけじゃない」

「しかし、閣下、あれは……」

「直接手を下したわけじゃないからって、免責されるわけじゃないよ。あれは止めるべきだったし、とめられなかったんだから」

ドレドへの空襲が強行されたのは昨年五月。七一四年にドレド艦隊が行なった母星空襲への報復として、ドレドの主要都市七九

箇所が熱核爆弾と超融合爆弾の無差別爆撃の対象となった。この空襲で一〇億以上の死者を出したドレドは、国家としての組織を破壊されただけでなく、放射能に汚染され事実上不毛の惑星と化したのである。

爆撃を強行したのはベケット少将指揮になる新編成の第八艦隊。参謀本部はマールク艦隊を母星へ召還し、その隙を縫ってドレド空襲を実現しようとしたのである。

「なんちゅう連中だ……」

マールクが嘆じた通り、余りにも姑息な手段だった。事情を聞かされたアリシアも憂い顔に満腔の同意を示した。

「少なくとも一国の参謀本部の立てるような作戦ではありませんね」

ドレド宇宙軍は最後の抵抗を示した。第八艦隊は、すでにドレド宇宙軍の艦隊戦能力をゼロと見做して、ろくな護衛部隊も連れていない航宙母艦機動部隊だったから、本格的な抵抗の前にはひとたまりもなかった。ないはずだった。マールク艦隊が駆け付けていなかっただけなら。

「止める、馬鹿なことをするんじゃない。今更ドレドを灼いてどうなるんだ。爆撃を中止しろ」

「参謀総長閣下は、小官にドレドを爆撃せよ、と命ぜられました」

ベケットは肉の厚い無表情さをびくともさせなかった。

「参謀総長閣下の命令は、共和国宇宙軍にとって最高の命令であります。マールク司令長官閣下のご命令であっても、まげるわけには参りません」

「ドレドはもう負けてしまったんだ。死体に止めをさす馬鹿がどこにいる！」

“ドレドはまだ降伏しておりません。而して、まだ負けておりません。よしんば降伏したとしても、共和国に刃向かった反逆者には死を以て報いるが、宇宙の大義のよってきたるところ。マールク閣下のご命令は受けられません”

爆撃は強行されたが、皮肉なことにはベケトフの乗艦『スヴォロフ』は、ドレド地上基地の放った高出力レーザーに射抜かれて轟沈した。第五艦隊を指揮していたセルテイ・マックスが指揮系統を失った第八艦隊を掌握し、それ以上の虐殺を止めさせなければ、惑星ドレド上で繰り広げられた地獄図はさらに凄惨なものとなったであろう。

驚くべきことは、共和国市民と政府の態度だった。六月一日の復讐”を唱え、政府に空襲の強行を迫ったのは共和国市民に他ならなかった。しかし、マールク艦隊の手でドレドの惨状が伝えられると、母星の大手ジャーナリズムは筆先をそろえて“共和国政府の暴挙”を攻撃し始めたのである。

アリシアは解説する。
「ヘンチエ主席のスキヤンダルが報道され始めたころでしたもの。ミスタ・ヘンチエの失政を攻撃するにはベスト・チャンスだといふんでしようね」

参謀総長のドロク元帥が議会で弁明に立ち、
「……ドレドの惨事は、出先の艦隊の暴走である。暴走を許したことは遺憾の極みであるが、反逆者集団であるドレドが当然の報いを受けたことには何の変わりもない」

強弁であり、詭弁である。
「ベケトフを叩いてでも止めるべきだった。違うかな？」
「そこまでやれば神様みたいなものでしょ、違いますか？」

「確かにね……」

七一六年六月、漸く“ドレド戦役”は終結したが、余りの虚しい結末にマールクは言葉がない。共和国圏に二つしかない居住可能な惑星同士が互いに核攻撃し合った拳げ句、彼らにとつて唯一の居住圏を廢墟同然に陥れたのだ。核攻撃によってばらまかれた夥しい放射性物質は、空襲での負傷者ばかりでなく直接の被害を受けなかった市民の生命を次々に奪い去りつつある。必死の汚染除去作業の行われている母星ですら、放射性物質による発病者は既に一〇〇〇万を超えたと言われるのだ。

「フェレラ首相は、ドレドの汚染除去も急がせるつもりのようにです。でも、官僚や参謀本部の反対が根強く、中々思うようにはいかないようです」
「反対ねえ……」

「ドレドを復興させても票にならないから……」
ため息とともに、アリシアはワインを咽喉の奥に滑り込ませる。姉弟ともにアルコールにはさして強い体質ではないらしく、ワイン・グラスを半ば乾しただけでアリシアは頬を染めていた。
「なるほど……票にね……」

マールクの呟きも苦しい。彼は政治システムとしての民主主義が嫌いではない。しかし時として、選挙に勝つことだけが政治の全てと勘違いしているような共和国政府の姿に苦々しさを覚えなれない。あるいは完全な嘘である。部外者であるからこそ、苦々しさを感じるのであつて、当事者として政争を演じている人々は、あれはあれで結構真面目にやっているのではないか……などと思うのは、マールクの感性が多少常人とずれている事実を示すものかもしれない。

「さして広くもない居間に沈黙が満ちた。ローナクは、勝手に持ち出してきたアイスキューブとウイスキーのオンザロックを手に考え込み、ヤンデキファイティは料理を平らげる手を休めてフォークを冷水のグラスに持ちかえている。アリシアとネイは、ワイングラスを手にしたまま暖色のカーペットに視線を落としていた。」

「……第八艦隊ですが……」

「第八艦隊がどうかしたのか、ネイ？」

「あの艦隊は宇宙軍艦隊……つまりマールク艦隊の直属ではなく、政府の直接指揮に入ることになっています」

「ああ、ヒューがそんなことを言っていた」

ヒュー……ヒュンテ・クリュッペル少将は、ロメイチェフのもとで情報先任参謀を務めていた。計数に優れた緻密な頭脳を持ち主で、ロメイチェフの戦死後もマールクの情報参謀としての任務を過不足なく務めていた。そのクリュッペルが少将に昇進し、第八艦隊司令官に任命されたのはつい先日のことである。

「小官は情報参謀としては一流と思っておりますが、艦隊を指揮して閣下と肩を並べられようとは思っておりません。昇進して迷惑というのは、軍人としてはあるまじきことであります……」

マールクはクリュッペルの愚痴を愚痴とは思わなかった。クリュッペルを失うことでマールク艦隊は得難い情報参謀を失う。そして第八艦隊は、指揮官としての資質にはさして恵まれていないクリュッペルを戴いて、万一の場合には戦闘に突入しなければならぬ。この人事で得をする者がいたとしても、それはマールク艦隊の一員ではない。

「オレーグの小父さんが言っていたが、なんかまたこそこそやり始めてるらしい」

「こそこそとは？」

「こそこそさ」

わかるだろ、とローナクは無造作にグラスを傾ける。さして薄まってもいないウイスキーをまるで水のように咽喉の奥へ放り込む。

「知りませんが、アリシア？」

姉をファースト・ネームで呼ばれて、ネイが少しむっとしたような表情になる。大学時代からの友人ではあっても、ネイはローナクのブレイ・ボーイとしての一面を少なからず嫌っている。

「知らないか……って、惑星コーウインのことかしら？」

「コーウイン？」

銀河系宇宙の辺境に位置する……という位置関係も、ここ二三年でようやく判明した事実なのだが……共和国圏は、厚い暗黒星雲と、“ギンヌンガの間隙”と呼ばれる銀河系宇宙の腕の切れ目によって外宇宙から切り離されている。

「何番目に出した探査船でしたか？」

「忘れた」

共和国圏最大の要衝ドライバオムに要塞を建設する一方、マールクは“ギンヌンガの間隙”に細く連なる恒星系の回廊宙域を発見していた。隣接する“ギンヌンガ腕”……のちに“ターミア腕”と呼ばれるようになるのだが……まで約五〇〇光年のこの回廊宙域に沿って、マールクは何度も探査船を派遣した。

「出先機関のやることだし、金もなかったから大したことはできなかったけれどね」

何度目かの探査船が、この回廊宙域……ル・ラント回廊宙域の“ギンヌンガ腕”側の出口に発見したのが惑星コーウイン。G型

標準的な恒星の第三番惑星で、理想的なサイズと海陸比、そしてなによりも何らの改造処置も施す必要のない組成の大気を備えた惑星だった。本格的な惑星改造の技術を持たない共和国にとつては願ってもない朗報といえた。大気組成の改造技術さえあれば、居住可能な惑星が共和国圏に皆無というわけではなかったのだから。

「しかし、噂ですが……」

料理の塊を一口に頬張ったヤンデキフィティである。ワインで料理を咽喉に押し込むと、声をひそめる。

「先住民がいるとか……」

「……らしいね。ただ、確認されたわけじゃないし、コーウィンに関する情報は政府に抑えられてしまった。わたしにもよく分からないんだ……で、コーウィンに関してなにかあるんですか？」

「ミスタ・ヤンデキフィティのおっしゃるとおり、噂ですけど……」

「……？」

「コーウィンの占領のために第八艦隊を派遣する……という計画が練られているという噂を耳にしました」

「第八艦隊を……ね」

「約一二〇〇隻。艦隊というには少々小規模に過ぎますが」

「それはちょっとまずいのではないかしら……もし、先住民がいるとして……コーウィンの原住民なら一方的な侵略になるし、もしもコーウィンがドレドのような植民星だったとしたら……」

「下手に軍事力を持ち込むと戦争になる……」

「アリアの危惧をマークが締め括る。」

「わざわざ第八艦隊をマーク閣下の指揮から切り離れたのも気

になります。政府や参謀本部は謀略にかけては超一流と言っているですから……」

「それで、政府の方はどうなんだろう？」

「呆れた話ですけどね、コーウィンの占領は、ミスタ・ヘンチェの時代に既に閣議決定されていたらしいんです。これも噂ですけど、ドロク参謀長は、閣議決定をかさにきてフェレラ首相に第八艦隊の動員を迫っているようです」

結構詳しいですね、というマークに、アリアは微笑って応える。噂のソースには事欠きませんから。

それにしても呆れたことだ。コーウィンが発見されたとき、マークは未だドレド艦隊と一杯の戦いを続けていた。今日の夕食代も支払っていないのに、もう明日の買物の算段をしているのだ。「軍事力をまるで万能の霊薬のように思い込まれては困るな」

「ドレド戦役」は、勝つてはいけない戦争だった……そうおっしゃるつもり？」

蒼みの強いグリーンの眸に正面から見据えられ、マークは考え込む。

「勝つてはならないときに勝ってしまったために滅亡した国家が無数にある……と？」

「否定はしません……少なくともわたしは死にたくなかったし、死にたくなかったからあの戦争を戦った。結果がこれです。ネイもヒースもメルもそうですし、他の同僚たちもそうですよ」

「それはわかります。だから、きょう辞表を出しに行かれたのだと」

「で、代わりに元帥への辞令ですからね、笑うしかない」

紅茶を入れましょうか……ほぼ空になった料理の皿とワインの

ポトルに視線を走らせながら、アリシアがソファから身を起す。料理の大半は、ヤンデキフィティの健啖さに征服され、ワイン・ポトルの中身の方は半ば以上マールクの咽喉に流れ込んだらしかった。もっとも、ローナクはウイスキー・ポトルとアイス・キューブさえ身近にあれば満足そうだったし、アリシアとネイの姉弟は、食欲にかけてはごく標準的なものしか持ち合わせていない。

紙のように薄い白磁器の茶器は、アリシア自身とネイ、そしてマールクの三人の前にだけ置かれた。ローナクとヤンデキフィティにも白磁のティー・カップで紅茶を供しようとするアリシアを、ローナクが止めたのだ。

「酔ってますから。普通のカップか、マグで結構。メル、お前はどうか？」

「紙コップの方が性に合ってますが……そんな高級な器は怖くて持てません。壊しちまったらと思うと……」

「紙コップでしか紅茶が飲めないのだとしたら、軍隊ってつまらないところね。わたしも二年ほどいたけれど……」

程なくテーブルの上には淡いブランドイの香りを漂わせて、五つのカップが湯気を揺らめかす。

「……もう、戦争はないんでしょうね」
ヤンデキフィティだった。

「九年も戦いました。もう沢山じゃないですか。沢山じゃない人がいるんですか？」

「いるさ……」

「誰です、ローナク提督。あなたですか？」
「俺じゃない。政府さ。参謀本部もだ。軍需産業もだろつな」
「言うなりにならなきゃならない……？」

「それが共和国の意思であるとすれば……」

七一年一月、ドレドの無条件降伏受諾の調印式に同席したマールクは、そのまま艦隊を率いてドライバオムの要塞に帰還する。後事を第三艦隊司令官ベイ・ドレン中将与、後方先任参謀のウォロンステッド・オレーグ大佐に委ねたマールクは、ネイとローナク、それにヤンデキフィティを連れて旗艦『クレストルランス』号でナキャソの要塞に戻ってきたのだ。目的は辞表の提出である。「ドレド戦役」が終結し、ドレドからの脅威が消滅した以上、これ以上軍にとどまる必要性をマールクは認めなかった。政府に必要以上の警戒心を引き起こさせないためにも、『クレストルランス』号を護衛する艦艇も僅か一〇隻に留めたのだ。

無論、ネイもローナクも賛成しなかったし、アリシアも同意を示さなかった。マールクが辞職するならネイを初めとしてローナク、ドレンスらマールク艦隊の首脳も連袂して辞職するつもりだったのだが。

「でもなんでかな、いつまでもわたしを軍に張りつけておきたくなんかないだろうに……特に参謀本部としては」

アリシアはにこりとほほ笑み、そしてあっさりと思えた。
「政府はあなたが怖いんです」

「怖い……ですか、わたしが？」

「ええ、お気付きになりませんか？ “救国の英雄”としてのあなたの声望がいかに大きなものであるか」

「だから図に乗ってクーデターを起こすでも？ まさか、それならさっさと辞めさせた方がいいでしょうに」

「そうじゃありません。あなたが“救国の英雄”の名声を背景にして政界に進出すること、それを彼らは恐れているんです」

ため息とともにマールクは肩を大きくすくめて見せた。
「参つたな……どつちも柄じゃないのに……」

共和国宇宙軍第八艦隊司令官のヒュンテ・クリュッペル少将が、政府主席のピセンテ・フェレラからの召喚を受けたのは、七十七年の四月である。

マールクを代表とする艦隊司令部、及びアリシア・ミュッケルを中心とする野党グループの根強い反対、そしてフェレラ自身の消極的な姿勢にもかかわらず、惑星コーウィンへの出兵は閣議決定をみていたのだ。

「コーウィンに現住生物が存在するとしても、我が国の生存に優先するものではない」

コーウィンへの出兵を最も強硬に主張したのは、当時軍需大臣の地位にあつたゾンマーフェルト・ロヴェルである。

「既に我が共和国圏は飽和しつつある。新天地が必要なのだ。コーウィンを得れば、共和国圏のさらなる発展が保証される。共和国の生存は宇宙の大義であり、この大義から見るに現住生物の先住権などというふやけた議論は愚劣の極みである」

「軍需相の意見に賛成する。ただちに出兵。もし、現住生物が小癩な抵抗を示すようであれば、これを完膚なきまでにたたきのめし、宇宙の大義のよつてきたるところを示すべし！」

宇宙の大義ねえ……とはマールクのつぶやきである。政府首脳と参謀本部は、ことあるごとに“宇宙の大義”とやらを唱える。では、その大義とは何を意味するのか、そのあたりの解説を聞かされたためしは一度もない。

「貴官は、崇高な大義に疑義を差し挟むか！」

その疑問を口に出したとき、マールクは参謀少佐肩章の中年士官に怒鳴りつけられたことがある。“ドレド戦役”の終結がなった直後の“戦勝祝賀”のパーティーだった。

「貴官のような若造が、崇高なる聖戦目的と、神聖不可侵の宇宙の大義に一言でも疑惑を差し挟むとは許せん。外へ出る。正義の鉄槌を下してくれる」

「それは御免こうむりたいですね、少佐」

腕力にはまったく自信のないマールクだった。もつとも、速成教育を受けていた時代から、上官の理不尽な暴力にはおじ気付いたことがないのも、マールクという青年の不思議さだった。

「聖戦目的の言い、崇高な大義と言い、正義とおっしゃるんです。ただ、内容の理解に、小官と少佐とでは若干の相違が見られるようです。相違を整合したい。ただそれだけです。他意はありません」

「貴様、そうやって聖戦目的を愚弄し、大義を嘲笑することこそ許されがたい冒流行為であると気づいておらんのかっ！」

貴官が貴様になった。茹で上がった参謀少佐が伸ばした腕を、マールクの軍服の襟元が掴み上げられる前に、横合いから伸びてきた頑丈な手が掴み止める。

「何を。貴様もこの若造の仲間かっ！」

怒鳴りつけかけ、人込みの間から“ちよつと失礼”と声をかけながら現れた金髪の偉丈夫を前にして絶句する。ヒースクリフ・ローナク中将は、身長で優に二〇センチ、体重でも三〇キロは件の少佐を凌駕している。鍛えぬかれた均整では比較にならなかつた。

「まあ、仲間といえば仲間ですが。それよりもパーティーとは食

事を楽しみ、酒を味わい、ご婦人方との親交を深める場所です、少佐殿。少佐のように喚き散らされては、せつかくの酒が不味くなります」

「き、貴様、愚弄するか」

「愚弄しているのは貴官の方だ、少佐！」

「勇将」ローナクの叱責は、あたりをはばかって低かったが、鋼鉄の鞭の凄まじさをもって参謀少佐を正面から拍ちのめした。

「好まんが、貴官の論法を以て報いることにする。このパーティーは、すなわち我ら軍人にとつても公務の場である。公務の場において、貴官は宇宙軍大将・艦隊最高司令長官を貴様よばわりし、さらには宇宙軍中将・第二艦隊司令官に対しても聞くに耐えぬ暴言をもつてした」

「た、大将……最高司令長官……？」

「軍法会議においていかなる弁明を用意するつもりか？上官に対する侮辱は、軍籍剥脱をもって報われることを、まさか忘れたわけではあるまい」

「ヒース……余り脅かすのはやめにしてくれないか。気の毒に真つ青じゃないか」

マークが仲裁しなければ、ローナクの舌鋒は参謀少佐を気死させるに十分だった。「マーク艦隊の獅子」と異称されるローナクである。机上で書類と兵棋しか弄んだことのない参謀士官とでは、迫力に違いがありすぎた。

ローナクは腕を離してやり、死者に変わらない顔色になった少佐は辛うじて敬礼すると、人込みのなかにそそくさと姿を消した。「しかし、あれですね。聖戦、宇宙の大義、崇高なる目的……時代を読むキー・ワードとやら言つやつですね」

「うん。キー・ワードさえならばたら、なんか時代の最先端にいるような気になる。実際のところは、思考停止用語なんだろうけどねえ」

「思考停止用語」とは、マークのよく使う表現である。スローガンと言いかえてもいい。誰もが意味を知っているとの暗黙の了解がなされているために、内容そのものに異論を挟むと、「聖戦目的の愚弄」、「崇高な大義に反する意見」などというわかつたようなわからないようなレベルで封殺されてしまう。

「こつというのは、あんまり安全な傾向じゃないですね」

「じゃないね。で、どうなんだ、少しはパーティーに出た甲斐はあったのか？」

いつもなら副司令官のネイス・ミュッケルを伴うところだったのだが、この時はローナクの強い希望を容れた形になった。

「まあね」

手にしたグラスを掲げてみせる。ローナクの視線の先に、やはりわずかにグラスを掲げ返す黒髪の美女を見いだして、マークはため息をついた。

それがほんの数カ月前である。

クリュッペルはすでに命令の内容を知っていた。首相のピセンテ・フェレラを初めとして、国防相のクラゲル・ブラウエン、軍需相のゾンマーフェルト・ロヴェル、参謀総長デスタリヴァ・ドロク元帥、参謀次長フォルター・ワシエックらが会議に臨席している。マーク元帥を初めとする艦隊の実戦部隊指揮官を全て欠いているのが、異様と言えば異様である。

「マーク元帥は？」

「マーク提督は欠席する。今次作戦はマーク艦隊司令部から

は独立した作戦として実施されるものだ。マールク提督の出席を仰ぐまでもない」

朗々たる響きを帯びた雄弁はドロク参謀総長のものである。“ドレド戦役”での“戦功”により四〇代の前半で元帥に昇進し、いまやマールクと並んで宇宙軍を統べる立場にある。雄弁家としても有名だった。

しかし、参謀長のオルデンドルフ中佐を伴ったクリュツペルの危惧は大きかった。“ドレド戦役”で実際に前線に立っていたのはマールク艦隊の将兵である。ところが、共和国政府はマールク艦隊司令部の参画を拒んだばかりか、ろくに実戦にも参加していない第八艦隊を動員してコーウィンへ出兵しようとしているのだ。

士官学校をトップクラスの成績で卒業したクリュツペルである。戦争や軍隊の存在そのものに疑問を抱いたことはなかった。学徒兵や下士官上がりが大半をしめるマールク艦隊司令部の面々とは、その点で若干感覚の違いが存在する。と言って、情報を軽視し、ろくな補給計画も戦略上の考慮もなく戦争に勝てると思う程、クリュツペルは共和国宇宙軍の“無敵”を信じていない。

「さて……実戦部隊の指揮官が到着したところで討議に入りたいのだが……」

フェレラ首相が口火を切る。苦渋に満ちた表情をみやって、クリュツペルは噂が正鵠を射ていたことを知った。半ば脅迫に近い言辞を弄してフェレラに出兵を裁可させたのが、ブラウエン、ロヴェルといった強硬な主戦論者たちであり、かれらに資金的な援助を与えている軍需産業である、との噂である。さらに、かれらに暴力によるバックアップを与えているのが、ドロク元帥を中心とする参謀本部なのだ……

「動員兵力は第八艦隊一二〇〇隻、及び空陸両用部隊七個師団、合計八〇万の兵力ということになっているが……参謀総長、この兵力は十分なものだろうか？ マールク艦隊は二万の艦艇を揃えても、最後までドレドには降下作戦を実施しなかったと記憶するが」

「作戦の適否は我が光輝ある参謀本部の坦務するところでありま

す。今更、疑義を差し挟まれてもお答えするわけには参りませぬ」

「今次の出兵により、我が共和国は新たな植民惑星を得ることができる。共和国の輝かしい未来を拓こうとする作戦に消極的な首

相の態度には、納得できんですな」

これは孤立無縁だな……出兵に反対なのは首相と、クリュツペル自身。他の臨席者は出兵の可否を議論するつもりも欠片もない。

フェレラに指名されて発言の機会を得るまで、クリュツペルは数回の無視を耐えなければならなかった。

「無論、我々前線指揮官としては、命じられればどこであろうと

出撃を厭うものではありません。まして、未知の領域への先陣を

務めるのは武人としての名誉、これに過ぎるものではありません。

しかし、未知の領域に踏み込まねばならないからこそ、我々としては万全の準備を整えたい。これも事実であります。その意味

で、参謀総長閣下にお尋ねしたい。第八艦隊一二〇〇隻の内、四〇〇隻をドライバオムに残せとの指示であります。ドライバオムにはマールク艦隊の主力があります。四〇〇隻程度の残留部隊を残す必然性はありませんし、兵力の逐次投入という結果になり

ます」

兵力の逐次投入は最も拙劣な戦術だったが、同時に参謀本部の

常套戦術でもあった。“逐次投入では勝てない”と主張する前線指揮官たちに、当時のターク参謀総長は言い放ったものである。“我が軍は無敵である”。

無敵だから負けないのではなく、負けないように戦うから無敵と呼ばれるようになるのではないか……生粋の宇宙軍士官だったクリュツペルをして、参謀本部への忠誠心を失わせしめたのは、参謀本部以外の何者でもない。

「少将、作戦に関しては既に議論は尽くされている」

「我が艦隊では尽くされておりません」

うるさそうに精悍な眉をひそめるドロクの表情を、敢えて無視して主張を継続する。

コーウィンに関する情報が余りにも不足している。コーウインの属する恒星系の地勢情報や天象情報も不足だし、空陸両用の兵団を降下させる地点も、大雑把な緯度と経度が指示されているだけである。更には、コーウィンに居住しているらしいとされる先住民たちのことは何も知らされていないのだ。

「……数百年に達する未踏宇宙域の制式艦隊による遠征は、共和国宇宙軍の歴史に存在しません。詳細な情報を抜きにして、史上初の快挙を成し遂げよ、と言われても、小官はその自信なしとお答えする以外にありません」

「情報参謀出身の貴官が情報の重要性を強調するのは理解できる」

“情報の重要性が理解できる”とはドロクは言わなかった。「しかし、艦隊作戦というものは、情報だけでは成立しないものなのだ。戦場では、常に完璧な情報が入ってくるなどという保証はどこにもない。断固とした決意と必勝の信念さえあれば、情報

の不足など言うに足りないものだ」

「決意と信念が重要であることを否定するものでは、もちろんありません。しかし、母星からドレドまでの約二二〇〇光年を進むのに、マールク大将……いえ、元帥でさえ二年以上をかけたのです。コーウインの領有が国家の命運を左右するプロジェクトであるなら、一〇年単位の時間をかけても、徒に巧遅に走ったとは言えないと考えますが」

「マールク艦隊の一員だったからといって、生粋の宇宙軍士官である貴官が、マールク提督の戦い方に学びたがる気持ちは理解できないぞ、クリュツペル提督。それにマールク提督の戦術を支持したがるあなたもだ、フェレラ首相」

ブラウエン国防相の口調は奇妙に狂信的な響きを帯びて、聞くものに不快の念を引き起こさせる。事実、狂信者とは言わぬまでもそれに近い人物で、“国防を阻害するあらゆる脅威を排除するための委員会”なる上下院議員のグループを主宰していた。

「マールク提督の戦術など、所詮素人のまぐれ当たりではないか。たまたま好運に恵まれて元帥にまで成り上がったとはいえ、学生上りの素人軍人の戦術とも言えない戦術を、プロの軍人である貴官が模倣して、それで国家に対する神聖なる義務を果たせると思っているのかね。光輝ある宇宙軍軍人としての矜持と誇りは羽を生やして飛び去ってしまったとも言っかね」

「お言葉ですが、ブラウエン国防相閣下。戦略・戦術には、天才とそうでない者のみがありえます。中間はないのです。小官は宇宙軍の軍人である自分に自分なりの矜持をもっております。しかし、いえ、それがゆえに、戦略・戦術における天才の存在が恐ろしいのです」

「まさかマールク提督が天才だとも言いたいのではないだろうな？」

「そのまさかではありません、閣下」

「この会議は、コーウィン出兵のための国防戦略会議だったと心得るが……？」

ブラウエンはフェレラに視線を転じた。

「マールク提督への信仰を布教するための集まりだったとは知らなかった。であれば、国防相が出席する必要もないだろう、違うか」

「……お待ちください、国防相閣下。小官は、準備不足のままに地理不案内な恒星系へ艦隊を進出させる不利を説いているに過ぎません」

「不利を説くだと？それがすでに敗戦主義的虚妄に陥っている何よりの証拠ではないか。たとえ、我に数倍する艦隊が待ち受けていようと、断固としてこれを粉碎し、宇宙の大義のよつてきたるところを明らかにする、これこそ我が光輝ある共和国宇宙軍ではなかったのか？」

「いかにもおっしゃるとおりですな、国防相。ましてやすでに二万隻を超える無敵艦隊を作り上げた我が共和国宇宙軍は無敵でありますから」

自信満々の微笑とともに、ブラウエンのアジテーションを肯定するドロクを、クリュツペルは目眩のしそうな気分で凝視した。そのドロクがクリュツペルに叱責の声を投げ付け、ブラウエンに謝罪するよう命じる。

マールクなら席を蹴っていたかもしれない。これは茶番だった。フェレラは苦渋を満面に湛えたまま沈黙に陥り、ドロクとワ

シエック、ブラウエン、ロヴェルといった面々が自画自賛的に今回の出兵計画の“偉大”さを誉め讃えるのだ。しかし、実際に数百年余りを踏破し、未知の惑星に艦隊を連れていかなければならないのはクリュツペルである。彼らではないのだ。

「なるほど……そういうことが……」

クリュツペルからの報告を、マールクはナキャソの宇宙要塞で受けた。情報と準備の不足を指摘し、遠征の危険性を訴えたクリュツペルの意見具申は、フェレラ首相の消極的な支持をもってしても、ブラウエンやドロクの容れるところとはならなかったのだ。

「我に数倍する艦隊が待ち受けて……なんて台詞を国防相が口にしたのか？」

“メチャクチャです。まるでゲームをやる感覚です。戦略や戦術なんて次元の問題じゃない”

「それはわかっていたよ……“ドレド戦役”のときから連中はそうだった」

ブラウエンにしてもロヴェルにしても、軍需産業との関係が強い。“ドレド戦役”で壊滅的な打撃を受けた共和国の社会組織をよそに、軍需産業と、これを支える金融資本だけはまったく被害を受けなかった。ドレド艦隊の母星空襲で無数の市民が一家全滅の悲劇に遭っている。引き継ぐ者のなくなった預金は、共和国政府の特別立法で国庫に納められたはずだった。が、無論そのような預金総額の正確な申告は義務づけられなかったし、義務づけられていたとしても、事実が申告されることなどありえなかった。

一方、七年近くにわたった“ドレド戦役”は、母星の軍需産業に空前の活況をもたらした。七年間に建造された軍事艦艇は三万隻に達し、政府から支出された戦費は数兆RC（共和国通貨）に上っている。

“ドレド戦役”が終結し、共和国政府は、差当たりこの巨額な戦費の支出から免れた。軍需産業側から言えば、年間一兆RC近い確実な収入減を余儀なくされたことになる。戦役が始まる前は、それがなくても十分に収益を上げていたのだから文句を言うべきでもあるまいに……マールクはそう思うが、一度得たものを失うのは、最初から得られなかったのよりもはるかに苦痛である。

一個艦隊……正確には半個艦隊程度の規模だが……が、数百光年を遠征すれば、そのための臨時出費もそれなりに巨額になる。共和国政府が、第八艦隊の出動を強硬に推し進めるのも、そのあたりが真の理由だろう。

「ヒュー、気をつけて行ってきてくれ。ドライバオムからはシャブリ艦隊を支援に出しておくけれど、せいぜい二、三〇〇光年くらいしか出られないと思う。危なくなったらただちに撤収することだ」

“了解です……”

もう一件不審なことがあるとして、クリュツペルは、第八艦隊の三分の一をドライバオムに残すように命じている参謀本部の不合理さを訴える。マールクは肩を竦め、髪をかき回した。

「要するに我々を信じていないのさ。その四〇〇隻は、我々に對する牽制だよ」

“下らないことをしますね”

「ああ、全くだ」

共和国曆七十七年五月二二日、一二〇〇隻の艦隊と一五〇隻の輸送・補給船団からなる共和国宇宙軍第八艦隊はナキヤソ要塞を出港、ドライバオム要塞を経て二九日に“ル・ラント回廊宙域”に入った。